

關西支部創立總會 並に 秋季大講演會

来る 11 月 24 日(日)大阪に於て關西支部創立總會開催を機とし秋季大講演會, 會員懇親會並に見學會を下記により開催致します。追而プログラム詳細は會員各位へ通知し参加申込を受けます。

期 日 昭和 15 年 11 月 24 日(日), 25(月) 2 日間

會 場 綿 業 會 館 (大阪市東區備後町 3 丁目)

[中央電氣俱樂部變更せり]

11 月 24 日(日) 學 術 講 演 會	自 午 前 9.00
關西支部創立總會	自 午 後 2.45
特 別 講 演 會	自 午 後 3.30
會 員 懇 親 會	自 午 後 6.30

11 月 25 日(月) 見 學 會

1. 株式會社神戸製鋼所西海岸工場

第三製鋼工場 壓鍊工場 第二線材工場 第四機械工場

2. 川崎重工業製鋅工場



學 術 講 演 會 申 込 受 理 下 記 通 り

(1) 溶劑に依る鹽化ヴィニールの補集に關する研究 (第 1 報及第 2 報)	古河理化研究所	{佐久間 昇 氏 中山 氏	忠 昇 氏
(2) スチロール樹脂の分子量分配状態に關する研究 (第 1 報及第 2 報)	同 上	{佐久間 昇 氏 舟橋 一 氏	英 雄 氏
(3) チタニウム化合物に關する研究 (第 15 報)	東京工大建築材料研究所	鈴木 三 氏	信 辰 氏
(4) 金屬マンガンの電析に就て (第 2 報)	京都帝大工業化學教室	{岡田 良 氏 田川 氏 北岸 氏	重 元 氏
(5) 漆の電氣化學的密着法	東京工大建築材料研究所	稻井 猛 氏	
(6) イサチン及びその誘導體の電解的還元	大阪府女子専門學校	櫻井 平 氏	武 靜 氏
(7) 電氣界面攪亂の研究 (第 17 報)	京大化學研究所	上野 正 氏	男 氏
(8) 礬土頁岩よりアルミン酸曹達の製造法研究 (其の 1)	滿洲輕金屬製造株式會社	{内野 至 氏 上野 氏 内野 氏 松野 氏	吉 松 氏
(9) 礬土頁岩を原料とするアルミナ製造法概論	同 上	内野 夫 氏	正 夫 氏
(10) 礬土頁岩よりアルミナ製造法 (其の 1)	同 上	{津野 秋 氏 内野 氏	秀 夫 氏
(11) 鉛蓄電池の極板の放電容量に關する研究 (續報)	帝國發明協會豐田研究室	和久 健 氏	村 夫 氏
(12) 空氣電池の耐寒性場進法に就て	鐵道大臣官房研究所	{中村 靜 氏 富田 氏	富 靜 氏
(13) 鹽化アルミニウム浴に於けるアルミニウム再結晶の一現象に就て	東京帝大應用電氣化學及光化學研究室 (滿鐵中央試驗所)	{龜山 直 氏 綠川 氏	山 直 氏
(14) 金屬状態と電氣化學	東京工大電氣化學科	武井 武 氏	井 武 氏
(15) 金屬酸化物に於ける電氣滲透に就て	遞信省電氣試驗所第六部	村岡 雄 氏	村 雄 氏
(16) 有機化合物電解還元壓研究 (第 2 報)	京都帝大農學部	{志方 三 氏 鈴木 氏	志 三 氏
ニトロ・メタン及びニトロ・エタンの電解還元壓			

昭 和 15 年 10 月

社團法人 電 氣 化 學 協 會
電氣化學協會關西支部創立準備委員

秋季大講演會

期 日 昭和 15 年 11 月 24 日(日)・25 日(月)兩日

會 場 綿 業 會 館 講 堂(大阪市東區備後町)

11 月 24 日 (日) 受 付 一 午 前 8 時 半 以 前 會 場 入 口
交 付 參 加 證 (參 加 者 へ 前 以 て 送 附) と 引 換 へ に 會 員 章 (バ ッ チ) 第 1 日
晝 食 券, 懇 親 會 マ ー ク, 見 學 會 マ ー ク 等 を 交 付

學 術 講 演 會 午 前 9.00 12.00
午 後 1.00 2.10 (次 頁 學 術 講 演 次 第 參 照)

關 西 支 部 創 立 總 會 午 後 2.30 - - 3.00

1. 會 長 換 授 鈴 木 忠 治 氏

2. 議 事
支 部 設 立 經 過 報 告
支 部 規 約 承 認 の 件
支 部 役 員 選 舉 の 件

3. 支 部 長 換 授

4. 祝 辭

特 別 講 演 會 午 後 3.00 - - 6.00

1. 合 成 化 學 に 於 ける カ ー バ イ ド の 位 置 東 京 工 業 試 驗 所 井 上 春 成 氏

2. 礬 土 頁 岩 を 原 料 と す る ア ル ミ ナ 製 造 法 概 論 滿 洲 輕 金 屬 製 造 株 式 會 社 内 野 正 夫 氏

3. 電 氣 化 學 工 業 と 工 業 資 材 京 都 帝 國 大 學 工 學 部 中 澤 良 夫 氏

會 員 懇 親 會 自 午 後 6.30 於 綿 業 會 館 食 堂

11 月 25 日 (月)

集 合 午 前 10.00 迄 に 神 戶 製 鋼 所 海 岸 工 場 前 に 集 合 の 事

神 戶 市 電 協 濱 下 車 徒 歩 2 分

阪 神 電 車 岩 屋 驛 下 車 徒 歩 7 分

省 線 灘 驛 下 車 徒 歩 10 分

1. 株 式 會 社 神 戶 製 鋼 所 海 岸 工 場 見 學 午 前 10.30—12.00

[晝 食 用 意 ア リ]

2. 川 崎 重 工 業 株 式 會 社 製 鋸 工 場 見 學 午 後 1.00—2.30

[神 戶 製 鋼 所 ヨ リ 徒 歩 5 分]

解 散 ————

參 加 申 込 要 項

申 込 期 日 11 月 10 日 迄 に 電 氣 化 學 協 會 關 西 支 部 (大 阪 市 北 區 北 扇 町 大 阪 市 立 工 業 研 究 所 内) へ 到 着 す る や う 申 込 み の 事

費 用 第 1 日 晝 食 代 1 圓, 懇 親 會 費 3 圓, 見 學 會 費 1 圓

申 込 方 法 同 封 振 替 用 紙 に よ り 上 記 各 會 費 又 は 其 の 合 計 額 を 御 拂 込 の 上 申 込 み の 事 (振 替 用 紙 は 必 ず 1 人 に 付 1 枚 使 用 の 事, 尚 拂 込 金 は 整 理 の 都 合 上 取 消 の 場 合 と 雖 も 返 金 せ ず)

見 學 會 定 員 150 名 但 期 日 内 と 雖 も 定 員 超 過 の 場 合 は 御 斷 り す る 事 有 り

參 加 證 申 込 受 理 の 方 へ 參 加 證 を 送 附 す。參 加 證 は 必 ず 會 場 受 付 に 示 す 事

昭 和 15 年 11 月

社 團 電 氣 化 學 協 會
法 人

電 氣 化 學 協 會 關 西 支 部 設 立 發 起 人

秋季大講演會學術講演要旨

11月24日午前9時 於大阪市綿業會館

(1) 溶劑に依る鹽化ヴィニールの捕集に関する研究 (第1報及び第2報) 自 9.00

古河理化研究所 佐久間 昇氏 中山 忠雄氏 (28分)

(第1報) 鹽酸とアセチレンとより鹽化ヴィニールを合成する時、普通數%のアセチレンを含有する混合ガスが得られるが、鹽化ヴィニールは -13.9°C の沸點を有し、工業的に實用し得る低温に於て尙相當の蒸氣壓を有する爲、唯單に深冷法のみにより液化捕集せんとする時は可成の損失を免れざるに鑑み、演者等は深冷法に併用すべき溶劑吸収法に就き二鹽化エチレンを溶劑として用ひ、溫度、液層の高さ、氣泡容積等と吸収との關係を考究し大體良能率を以て鹽化ヴィニールを経済的に捕集し得たるのみならず未反應アセチレンをも分離し得たるを以て其の結果に付報告せんとす。

(第2報) 鹽化ヴィニール並にアセチレンに依る二鹽化エチレンの飽和に關し研究せる結果、飽和状態に於けるアセチレンモル數は鹽化ヴィニールの場合の約1/10にして飽和に達する迄の時間も亦鹽化ヴィニールに比し極めて小なるを以て適當なる条件下に於ては良能率を以て鹽化ヴィニールよりアセチレンを分離することを得たり、以上の結果に付報告せんとす。

(2) スチロール樹脂の分子量分配状態に関する研究 (第1報及び第2報)

古河理化研究所 佐久間 昇氏 舟橋 英哉氏 (28分)

(第1報) スチロール樹脂は常温に於ては固體なるが、 $70-100^{\circ}\text{C}$ 邊より強き彈性を示し更に溫度上昇すれば次第に流動性を示すに至る。而して固體より彈性體に移る轉位點は分子量の増大につれて上昇するを以て軟化點附近に於ける物理的諸性質の溫度特性は分子量分配状態により大いに影響せらるるものと考へられ、分子量分配状態の異なる試料に付一定荷重下に於ける變形率、荷重除去後の回復率、可塑變形率及抗張力試験による應力-歪曲線等を種々の溫度に於て比較したる結果に付報告せんとす。

(第2報) スチロール樹脂は分子量の大小に依るは勿論、精度的に同一平均分子量を有する重合體に於ても分子量の分配状態の相違に依り特に物理的、機械的性質に著しき影響が認めらるるを以て、本報に於ては重合條件特に溫度及濃度變化と分子量分配状態との關係に付研究したる結果を述べんとす。

(3) 漆の電氣化學的密着法

東京工業大學建築材料研究所 稻井 猛氏 (16分)

漆の主成分ウルシオールは高級フェノール類で溶液に於ては若干の電導性を有し、陽極に電氣メツキ的密着法を施す事を得る。本講演に於ては之等に関する既往の實驗結果を綜合報告し、その工業的應用に就き述べる。

(4) イサチン及びその誘導體の電解的還元 (第1報)

大阪府女子専門學校 櫻井 武平氏 (12分)

イサチンを電解的に還元するときはその状況によつてデオキシインドール、オキシインドールを経て最後にデヒドロインドールとすることが出来る。又オキシインドールの生成に際してはイサチン及びインドキシルを生ずることが分つた。これらの生成條件に就て報告せんとす。

(5) 有機化合物電解還元壓研究 (第29報) ニトロ・メタン及びニトロ・エタンの電解還元壓

京都帝國大學農學部 志方 益三氏 鈴木 信氏 (16分)

脂肪族ニトロ化合物の電解還元壓研究のため、その代表的なものとしてニトロ・メタン及びニトロ・エタンをポーログラフ法により研究し、これらの諸性質をニトロ・ベンゾールのそれらと比較検討す。

(休憩)

自 10.50

(6) チタニウム化合物に関する研究 (第15報)

東京工業大學建築材料研究所 鈴木 信一氏 (12分)

TiO_2 は SiO_2 と比較して種々興味ある性質を有するものである。例へば SiO_2 が石英、トリヂマイト、クリストパライトの異像變移を示す如く TiO_2 にも金紅石、板狀チタン、銳錐鏤の3種の形態がある。轉移速度及溫度は色々の條件により支配されるが著者は加水分解條件を異にするチタニア、コロイドに就て此角度から研究した結果を述べる。

(7) 礬土頁岩よりアルミ酸曹達の製造法研究 (其の1)

滿洲輕金屬製造株式會社

内野 正夫氏 上野 至氏 内川 要氏 松野 吉松氏 (16分)

珪酸質アルミナ鏤と石灰及曹達との反應に關する知見、珪酸質アルミナ鏤と石灰及曹達との反應機構を閉閉なしむる爲に珪酸及アルミナと石灰及曹達と二成分三成分及四成分間の反應状態を研究し更に酸化鐵等の影響に及ぶ

(8) 礬土頁岩よりアルミナ製造法 (其の2)

滿洲輕金屬製造株式會社 津川 秀秋氏 内野 正夫氏 (16分)

礬土頁岩より明礬法によりてアルミナを製造するに當り特に注意すべき問題として從來の研究を追補せんとす。

1. 珪酸、酸化チタン等の硫酸による溶解率及明礬による除去率
2. 製造行程中に於ける鐵の還元及酸化法
3. 水酸化アルミニウム中の硫酸基の除去法

- (9) 鉛蓄電池極板の放電容量に関する研究 (續報) 帝國發明協會豐田研究室 知久健夫氏 (12分)
4月の講演會に於ては、放電容量を放電電流、電解液濃度、極板の細孔の大きさ及びその密度等にて表はす理論式の導出と、之を陽極板に関する放電結果に應用したる取扱の一例につき報告した。依つて更にその繼續として同型の陰極板に関する放電結果に同様の取扱を爲したる一例につき報告する。
- (10) 空氣電池の耐寒性増進に就て 鐵道大臣官房研究所 中村靜雄氏 富田平三氏 (12分)
空氣電池の耐寒性は主としてその電解液の氷結點に起因する。現在使用されてゐる鹽化アンモン溶液或は苛性ソーダ溶液に於ては -20°C 以下の耐寒性はむづかしい。苛性ソーダ溶液に苛性カリ溶液を順次混合すると、その耐寒性は増大する。苛性ソーダの過量の場合は最低 -40°C 程度、苛性カリが過量になれば -50°C 程度の耐寒性が得られる。
- (晝食 休 憩) —
- (11) 金屬マンガンの電析に就て (第2報) 自 1.00
京都帝國大學工學部工業化學教室 岡田辰三氏 田川重勝氏 北岸元良氏 (12分)
筆者等は第1報(本誌第8卷、第6號掲載)としてマンガン金屬電析溶液の組成、電解液のpH價等に就て報告せり。本講演に於ては主として金屬マンガン電析の電流能率と電解液の組成及びpH價等の關係に就て述べんとす。
- (12) 鹽化アルミニウム浴に於けるアルミニウム再結晶の一現象に就て
東京帝國大學工學部應用電氣化學及光化學研究室 龜山直人氏 (滿鐵中央試驗所) 綠川林造氏 (16分)
次の一現象を觀察した。即ち鹽化アルミニウムと鹽化ナトリウム及び鹽化カリウムを含む浴に金屬アルミニウムを入れ、 200°C 附近に靜置するときは浴面附近にアルミニウムの結晶が生ず。此現象の起る時の條件を究め、この結晶現象の機構に就て研究したところを報告する。通常の Al^{+++} よりもイオン價の小さきアルミニウムイオンの存在に由るものと推論する。
- (13) 金屬狀態と電極電位 東京工業大學電氣化學科 武井武氏 (12分)
金屬狀態に依つて電極電位が異なる。加工及び熱歪等を受けた金屬の電位は一般に常態金屬の其よりも卑である。従つて電位より金屬狀態が察知される。又電位が時間と共に變化する有様を觀察すれば金屬腐蝕の機構が推定される。本講演に於ては銀、亜鉛、マグネシウム、アルミニウム等の電極に就いて得た實驗結果を綜合して論ずる。
- (14) 電氣界面攪亂の研究 (第17報) 京大化學研究所 上田靜男氏 (16分)
- (15) 金屬酸化物に於ける電氣滲透に就て 逓信省電氣試驗所第五部 村岡隼人氏 (12分)

恩賜發明獎勵金に依る第二回合成ゴム發明懸賞募集規程

△ 題 目 合成「ゴム」の發明

△ 募集條件

- 應募發明は帝國臣民の發明にして左の各號に該當するものなることを要す。
 - 本發明の合成「ゴム」は之に適應せる配合劑を加へ、後處理を施して得らるゝものが現行の加硫天然「ゴム」(「エポナイト」を除く)と同程度或は夫以上の性質を有するものなること。
 - 本發明の合成「ゴム」は之に天然「ゴム」或は他人の發明に成る合成「ゴム」を配合せざるものなること。
 - 本發明の合成「ゴム」は國產資源を原料とし其の工業化の望みあるものなること。
- 應募者は發明者又は其の權利の承繼者にして帝國臣民又は帝國法人なること。
- 應募發明に付き特許を受くるの權利又は特許權は應募者に屬す。

△ 授 賞

- 合格者には恩賜發明獎勵賞牌及恩賜發明獎勵金を授與す。
- 恩賜發明獎勵金は金壹萬圓を限度とす。

△ 募集期限

昭和16年12月15日限りとす。

詳細規程は「懸賞募集事務」と表記し參錢切手封入申込まれ度し。

昭和15年10月5日

東京市麴町區丸ノ内3丁目2番地

主 催

財團 帝國發明協會
法人

電話 丸ノ内 {1888番
4073番